

# 『創造的進化』の人間観

——ゲーレンとの対比に於いて——

窪田 徹

『創造的進化』（以下、『進化』と略記）では、生命進化の過程に於いて、傑出した身体機能を持つ人間が、自然界で最も自由な能力を体現する動物種として描かれている。そして同書に於いて、まず人間の基本的な特質は、動物存在としての活動性にあると考えられている<sup>1</sup>。本稿では、この点をより一層明確にする為に、ゲーレンの人間論との対比を試みる。やはり活動性の問題を基盤に据えたゲーレンの言語論は、人間の知性を「活動の能力の附属物」(annexe de la faculté d'agir)とするベルクソンの人間観を、更に具体的に補完するものである。

第一章では、『進化』に於ける動物の進化の路線とは如何なるものであるかを明らかにし、その延長線上に人間の基本的特質を考察する。同書に於いて、動物種の一つである人間の特質を探究する為には、この問題は最重要である。第一章で論考する内容は、本論文全体の基底を成すものである。

第二章では、『進化』に見られる人間存在の特質と、ゲーレンの人間論との対比を行う。『人間』に於いて論考されている人間の「非特殊化性状」(Unspecialisiertheit)から由来する言語活動が、ベルクソンの人間観をどの様な点で補完し得るのかを強調したい。

更に第三章では、まず、『進化』の中軸を成すものとして論じられている、進化の運動の基本的傾向性に関して考察する。ゲーレンの人間論では、生命進化の問題が形而上的観念でしかないとして排除されている。しかし本章では、『進化』に於いてその所説の根本を規定するこの問題に触れ、それに拠つて再度、ゲーレンの「非特殊化性状」を中核とする人間観がベルクソンの人間観を如何に充実化させるのかを論考し、その対質の根本的意義を明確にしたい。

『進化』に於いて、人間の身体機能は、常に自由で柔軟な能力を孕むものとして、その存在の特質が最も高く評価されている。生命進化の問題を除外するゲーレンの人間論は、逆説的ではあるが、その様なベルクソンの人間観を具体的に補完し充実化させる可能性を秘めている。我々は、この点を本論文の結論として明らかにしたい。

## 一、『進化』に於ける動物の進化と人間の知性

最初に本章では、『進化』に於いて、植物種とは峻別される動物種の進化の路線は如何に表現されているのか、という点を論じ、その延長線上に、人間の基本的特質はどの様に把握され得るのかを明らかにしたい。これらの問題はすべて、生物の活動性の観点を中核として考察する。次章以降で我々は、同書に見られる人間の特質とゲーレンの人間論とを対質させるが、本章で提示する問題はその為の基盤を成すものである。

我々はまず、ベルクソンが、動物に於ける神経系統の役割と活動性との関係について、それをどの様に論じているのかを見ておきたい。

『進化』では、動物の神経系統の役割に関して、次の様に考えられている。

「神経系統は、∧有機物質の塊∨(mass de la substance organisée)に拡散している未発達で茫漠とした活動性を一定の明確な方向に導き、より一層の強度へ持ってゆくに過ぎない。動物の系統を下がるにつれて、神経の諸中枢はより単純なものとなり、互いに離ればなれとなる。そしてついには、神経の諸要素は消滅し、分化の進んでいない有機体の全身に埋没してしまう」(EC, 588)

ベルクソンは、動物に於ける神経系の役割を非常に具体的な局面で考えている。有機生体の機能の効力を環境にあって多方面で精確に發揮する為の柔軟な役目を果たすものとして、まず神経の諸要素は論じられている。「有機物質の塊に拡散している未発達で茫漠とした活動性」とは、言い換えるならば、有機生体が常に孕んでいる漠然とした生命力であろうが、神経系統とは、いわば、こういった生命力を自然界で出来るだけ明瞭な形で効果的に放射する為の役割を担っていると考えられるのである。

この点に関して、同書では次の様にも述べられている。

「神経系は、他の系と同様に、分業から生じたものである。それは機能を創出しない。神経系は、∧反射的活動∨(activité réflexe)と∧意志的活動∨(activité volontaire)といった二重の形式を機能に附与し、単に機能の強度と精度とをより一層高めるに過ぎない」(EC, 589)

『進化』では、なによりもまず、この二種の能力を色濃く体现する生命存在として、動物種が考えられている。植物種は、その細胞中の葉緑素の機能や土中の鉱物質から直接にエネルギーを獲得する為、いわば不動の状態で存続が出来る。ベルクソンは、こういった植物は、動かすにすむからこそ、又感じなくともすむ点を強調している(cf. EC, 590)。「感じなくともすむ」とは、動物種の如く、自然界で生体機能の効力を多角的に柔軟に発散する為の神経要素をまったく必要としない、という事である。この点に関して彼は、「植物に神経要素はある筈がない」と

も述べている (cf. EC, 592)。反対に動物にとつては、環境で存続してゆく為には、神経系の機能を発動する事に依つて絶えず自己の運動能力を維持しておかねばならない。

同書では、こういった動物の活動性について、環境に於いて動物が体现する事も出来る単なる一つの要素としては考察されていない。それはいわば、動物が存続してゆく為のあらゆる可能性を規定する、まさに不可欠の特質として考えられている。

「實際、或る動物種が活動性に満ち溢れる如くに見えても、麻痺や無意識が動物を待ち構えている。活動性は疲れを厭わずに、自らの役割を維持する他はない」(EC, 591)

ここで言われている「麻痺」(torpeur)や「無意識」(inconscience)の状態とは、植物の如くいつも大地に接触して不動の形で存在する事を示唆している。しかし、この様に、植物種が不動性を表わし、動物種が活動性を表わすという点では、二種の生命形態の間に大きな懸隔がある様にも見受けられるが、ベルクソンは、必ずしもそうは見えない。

彼は右の引用文に続けて、「寄生の習慣」という表現を用いながら、次の様にも述べている。

「動物が進化してきた路線にそつて、数え切れぬほどの衰弱が生じた。こういった動物の類落は、大方、 $\wedge$ 寄生の習慣 (*habitudes parasitaires*) に関係がある。その度に、植物生活の方へ路線が切り変わったのである。この様に、どこから見ても植物と動物は、双方の傾向を生まれたばかりの状態を持つ、同一の祖先から出て来たものである事を思わせる」(EC, 591)

動物が陥り得る「寄生の習慣」が表わすものも又、「麻痺」や「無意識」の状態と同じく、植物生活の路線として考えられている。『進化』に於いて、生物の進化の過程で動物種が植物種に優る積極性を孕むものとして論じられて

いるのは、活動性の多方面に渡る発散と、その状態の維持が具体的に認められている限りでの事である。植物の如く大地に接触して寄生する習慣は、動物の持つ神経系の機能を中核とした運動能力の衰滅によつては、次第に動物自身の内にも生じ得る性質となる。同書ではまず、大地という、いわば特定の平坦な環境域に根を張り続けられないという状態が、動物の保持する神経系統の最大の効力として論じられている。

ベルクソンは、動物が環境の不可測な峻に高度の精確性に依つて適応してゆく為には、なにより、こういった神経系の能力が必要であるという事を考えている。神経機能は、まず外界の事物に関する認識の原因となるものでなく、常に活動の自由度に関連する形で論じられている。言い方を換えるならば、動物に於いては、神経系が発達するにつれて活動の多様性が増加し、同時に自らの存在する領域に向けた広範囲の適応力が上昇すると、ベルクソンは考えるのである。

『進化』では、こういった活動の自由度に、動物の意識の在り方を連動させるといふ発想が見受けられる。

「神経の諸要素が存在する余地もなく、又、神経の諸要素が集中して一つの体系を成してもいない有機体であっても、反射的なものと意志的なものとが分かれてくる何ものかが存在する。それは、反射の如く機械的な精確さはなく、意志の如く知的に躊躇する事もない。しかし、どちらからも僅かに分け貰つているので、不確かで単純ではあるが、それだけ既に臚氣に意識された反応である。つまり、最下等の有機体にも、自由に動くその程度に依じて意識があるのである」(EC, 589)

ここでは、最下等の有機体であっても、環境に於ける順応の過程で、既に漠然とした意識形成の可能性が示唆されている。同書に於いて、活動性と意識形成との間に明らかな関係があると指摘される際、そこで言及される「意識」は、けつして最初から、動物のいわゆる「内的要素」を表現するものとしては考察されていない。こういった

場合、「意識」とはむしろ、なにより周辺環境への動物の反応と共に刻一刻と形成される要素として論じられている。幾度も述べる様に、ベルクソンは、動物が表現する要素として常に活動性を最優先するのである。彼は又、「意識を支えるのが（移動活動）(activité motrice)であつて、この活動が消滅してしまえば、意識は萎むか、むしろ眠り込んでしまう」とも考えている (EC, 589)。「意識を支えるのが移動活動」である限り、自らが存在する環境に対して意識的となり、安定した状態で存続を果たす為には、動物にとつて不断の活動性に満ち溢れている事が、まず大前提である。

上述した如く、ベルクソンは、動物種が環境順応を果たしてゆく過程で發揮する神経系統の役割として、「反射的活動」と「意志的活動」を挙げていた。これは、有機体に於ける神経系の根本的な二つの機能として考えられる。常時不定の自然界で存在しようとする為には、まず神経系の間髪を入れない「反射的活動」が重要であり、この機能は動物の中枢神経系統を構成する支柱として存在している。しかし同時にベルクソンが、動物に於ける運動の自由度の向上と共にその意識形成を考えるからには、そこで尊重される要素とは、「反射的活動」を引き受ける機能にいつも支えられた、「意志的活動」の為の神経要素なのである。

ベルクソンは、高等動物が的確な反射的活動をやつてのけるには、脊髓や延髄が必要であり、幾つかの選択を迫られる意志的活動の場面にあつては脳中枢が必要であると考へている (cf. EC, 589)。人間の場合、意志的活動の際に主要な機能を果たすものは脳髓の大部分を占める大脳である。そして、大脳の表面部位である灰白質の箇所を大脳皮質と呼び、人間は、精神作用を司るこの部分の神経網が、他の動物種に比しても異常に発達している。つまり人間は、意志的活動をやつてのける神経機能が最も発達した動物種であり、それだけに運動の自由度も高い。人間の豊富な運動能力は、この様に複雑に発達した脳中枢の機能に連動している。とりわけ、人間の精神活動に密接

に関連した大脳皮質の神経網は、他の動物種とは比較を絶した人間の知的営為にも欠かせないものとなっている。

しかし、先に述べた様に『進化』では、動物の神経系は外界の事物認識の原因を成すものとしては、まず考察されていいない。この点は、動物種の一つである人間に関しても徹底して変わらないものであり、同書に於ける人間観の根幹ともなっている。

ベルクソンは、人間の認識行為と活動性に関連して、簡潔に次の如く考えている。

「我々の知覚が我々にもたらすものは、 $\wedge$ 諸々の事物自体 $\vee$  (choses hénes) に関する知覚であるよりはむしろ、事物に対する $\wedge$ 我々の可能な行動の素描 $\vee$  (dessin de notre action possible) である。我々が諸々の対象に見出す様々な輪郭というものは、我々が対象に到達し得るもの、変化させ得るものを、単に示しているに過ぎない」(EG, 655)

自然界での人間の基本的な事物認識も又、あくまでその活動の能力と相関的に考えられている。人間の知覚行為が、周囲を取り巻く事物に対する「我々の可能な行動の素描」とされる時、そこで強調されている点は、人間が、いつも活動しつつ自らの存在する環境を理解しようとする、という事である。『進化』に於いては、随所で、人間の認識能力は様々な行動の展開と共に発達した事が言われている。ベルクソンは又、知性の形成を深く分析する為には、人間自身が常に活動している事を知る必要がある、とも述べている (cf. EG, 654-658)。彼はまず、人間の感覚・運動機能を優先し、いわば活動に拠って次第に形成された知性を考えるのである。人間の知性の形成とは、なにより多様な環境に順応する過程で鮮明化されてゆく、人間と物質存在との具体的な関わりに於いて論ぜられている。そこでは、生物としての人間の主要な身体機能、つまり脊髄や延髄、もしくは脳の中枢機能とそれに対応する意識的判断力の増大は、あくまで活動の観点から問題にされるのである。動物種の一つとしての人間は、進化の運動の

過程に於いて卓越した脳中枢を保持するに至ったが、ベルクソンはそういった人間の成し得る知的営為も又、徹底して活動性の産物として捉えている。

この様な彼の発想は、その人間観の根底を強固に形成するものであり、『進化』の序文の冒頭に於いてそれは端的に明示されている。

「生命進化の歴史は、依然としてかなり不完全なものであるが、脊椎動物の系列を人間まで登り詰める進化の路線にそつて、既に知性というものが不断の進歩によつて形成されてきた様子を伺わせる。理解の能力 (faculté de comprendre) とは、活動の能力の附屬物 (annexe de la faculté d'agir) であり、つまりは、課せられた生存の条件に、生物の意識がより一層確実に、より一層複雑に、そしてしなやかに適應する様を、この歴史は示している」(EG, 489)

先に強調した如く、植物の路線から峻別される動物の進化の路線とは、特定の環境に常時寄生する事がけつしてないという、つまりは徹底した活動性の維持として論じられていた。しかし同時に、動物種の体現する活動性は、進化の過程でいつも「寄生の習慣」と表裏一体である事も、ベルクソンは示唆していた。同書では、動物種のあらゆる可能性を規定する活動性は、生命進化に於いて所与のものとしては考察されていない。こういった中で、ベルクソンが脊椎動物の進化に伴つて次第に知性が形成されてきた点を重視するのは、人間が自然界に於いて、「寄生の習慣」から遥かに遠く掛け離れたところでその運動機能を駆使しつゝ、自己と自己の存する環境を認識し得るまでの能力を持つに至つたからである。

人間は、自然界で最も感覚・運動神経系統が発達した動物種として、「活動の能力の附屬物」である「理解の能力」を自由に發揮するまでになつた。しかしながら先述した様に、ベルクソンは、生物の意識が課せられた生存の条件



に順応しようとする過程では、生体の衰弱の危険性があらゆる場所で待ち構えていた事を考えている。進化の過程に於いて、こういった衰弱の可能性を、人間も又、常に身に帯びていた点を彼は念頭に置いている。しかし『進化』では、人間という動物種は脳中枢機能の効力に依って多彩な運動を組み立てる事が出来、又、新しい習慣を古い習慣に対抗させる事が出来る、とも述べられている (cf. B.C, 719)。人間の脳に於ける神経網の異常なまでの発達、今まさに存在している環境で生ずる障害の回避の為に効力を發揮するのではなく、多岐に渡る経験を貴重な知識もしくは情報として、人間自身が自由に活用する為の柔軟な余地をもたらすものである。

本章の冒頭に於いて、ベルクソンが動物の神経機能に関する基礎的な観点として、「神経系統は、有機物質の塊に拡散している未発達で茫漠とした活動性を一定の明確な方向に導き、より一層の強度へ持つてゆくに過ぎない」と言う事に触れた。人間の脳髓を構成する神経細胞の情報伝達回路は、その生体に潜在している活動性を、最早、環境適応の水準のみに留まらせる事をしない。ベルクソンは、こういった人間の生体機能の可能性を、生命進化に於ける「生の躍動」(elan vital) の最も顕著な表われとして描いている (cf. B.C, 720)。彼が、人間を高く評価するのは、脊椎動物の進化の過程で生じた知性が、「寄生の習慣」によって象徴される植物生活の路線からは遠く離れた所で形成されたものであり、有機界に於いて人間が自己の存在の可能性を持続的に練磨する為には、まさに最大の要素の一つともなり得るからである。

## 二、ゲーレンに於ける人間の「非特殊化性状」と言語活動

『進化』に於いて、人間は、生命進化の過程で最も柔軟で卓越した可能性を持つ生物として描かれている。更に

ベルクソンは、動物種の一つである人間の知覚行為を、「可能的な行動の素描」として見ている。彼は、人間の生体機構の内で感覚・運動系を最重要視し、「理解の能力」とは「活動の能力の附属物」であるとも言い換えている。同書では、人間の自由な知性形成も外部世界への適応に於いて必要であった他の性質と同様に、その活動性の産物として論じられているのである。

そして、生命進化に於ける視座からではないが、「哲学的人間学」(philosophische Anthropologie)を代表するゲーレンも又、人間の卓越した特質を考える際に活動性の問題に重点を置いている。ゲーレンの人間論ほどに、身体の活動機能を見据えつつ、人間の特質を徹底して論じている所説はない。又、彼ほどに、自然界に於ける人間の位置を明瞭に規定しようとする哲学もない。そこで本章では次に、『進化』に於ける人間観をより明確なものとする契機として、ゲーレンの人間論との対質を試みたい。

『人間』では、人間学的考察の要所とは、人間の生存の条件を問う事である、と述べられてゐる(Vgl. M. S16)。つまり、人間の言語活動や卓越した想像力は、あくまでその身体構造や独特の運動能力に照応していると考えられている。ゲーレンもベルクソンと同様に、人間の感覚・運動機能を重視して、その基本的な特質を論じようとしている。彼は、想像力や思考能力といった高度の知的営為も又、本来、人間という生物が環境で柔軟に存続してゆく為の必要条件から派生したものと考えている(Vgl. M. S18-20)。ゲーレンにあつても、人間の生存の条件を論ずるという事は、その複雑多岐に渡る生体機能の可能性を徹底的に考察するという事と同義である。特に『人間』では、人間がその身体能力を駆使し、有機界の不可測な状況に順応する過程で形成した知性の明瞭な表われとして、言語の問題が多角的に扱われている。同書に於いて、ゲーレンはベルクソン以上に、人間の知的活動を具体的に考えようとするのである。

両者には、活動性の問題を中核に据えて人間の基本的な特質を考えると、色濃く一致する所が認められる。双方共に、人間の豊富な身体の可能性は、その感覚・運動系統を核心として発動される事を強調するのである。しかしゲーレンには、人間の特質を考える際に、ベルクソンとは決定的に相違する点がある。

ゲーレンは、動物から人間へ至る進化の形態を論ずるといふ観点に強い反発を表明している。『人間』では、生命進化という概念は形而上的なものでしかなく、人間を進化の頂点に位置付ける事に拠って、その特質を他の動物種と対比するつもりはない、という事が強調されている (Vgl. M. S12)。ゲーレンをベルクソンと対質する際に、看過されてはならない重要な点がここにある。ベルクソンは、前章で論じた如く、動物種としての人間の意識形成をその運動の自由度に連動させて考えている。そこでは、動物の意識とは、周辺環境の変動に常に即する形で刻一刻と形成されるものとして見られていた。彼は、脳中枢機構を中心とする人間の意志的活動の可能性に關しても、それを、生命進化で見られる動物の身体の発達過程に於いて考察している。しかしながらゲーレンは、人間の身体機能の特質は、けっして他の動物種と比較検討する事に拠って明らかになるものではないと論じている。人間の特質は、有機界にあつて、その身体の機能を如何に活用するかという事に於いてすべてが表現される、と彼は考えている。『人間』では、人間の複雑な感覚・運動機能の性質は、常に言語活動と共に論考されている。人間に於ける比類の無い知覚世界は、いつも言語の使用に依つて具体化されるものであり、こういつた中では、人間の衝動構造はどこまでも「非動物的な」ものとなる、ともゲーレンは考えている (Vgl. M. S15-18)。人間にとつては、その身体を如何に活用するかという事がいつも重要な課題なのであり、この様な人間の在り方を、ゲーレンは、けっして他の動物と対比しようとはしないのである。

故にゲーレンは、ベルクソンに見られる様な生命進化の観点を完全に拒絶している。『人間』に於いては、自然界

での人間に関する進化論的な考察を批判する契機として、シェーラーの人間論が引き合いに出されている。『宇宙に於ける人間の地位』では、下等な生物の本能的水準から始まって、植物種とは区別される動物種の運動能力の重視、そして高等機能を保持する動物から人間の知性に至るまで、人間の特質が有機界の生命進化に於いて論考されている。ゲーレンは、シェーラーに見られる如き、下等生物から高等動物、そして高等知能動物から人間へ至る進化の過程を辿るという発想に関して、人間の特質を論ずる立場としては、それは既に古い観念的な図式でしかないと論難してゐる (Vgl. M., S23)。

ゲーレンはまず、人間とは「欠陥動物」(Mängelwesen)であると規定してゐる (Vgl. M., S20)。「欠陥」(Mangel)とは、人間が有機界に於いて、生来、特定の環境に常時順応する能力を持たない生物である事を示している。彼は、人間が、他の動物種に対して身を守る為の天賦の攻撃能力を持たず、卓越した逃走能力も無く、又気候変動に即応し得る為の体温調節に必要な体毛も無い事を考えている。ここでは、人間が自然界で如何に自らの環境を確保してゆくのか、という問題に重点が置かれている。この、自然界に於ける自己の環境の確保という点では、一見、『進化』に見受けられる、環境適応の過程で人間の特質を論ずるという態度と共通するものがある様にも思われるが、しかしゲーレンは、まさにこの点で非常に特殊な立場を取っている。

生来、人間が特定の環境に即し得る身体機能を持ち合わせた生物でないという事に関して、『人間』では、それを、人間という生物の消極的な要素としてのみ見做しているわけではない。遺伝的に、適応の為の特殊な身体能力を持たないという事は、同時に、人間という存在は唯一、他の動物種とは大きく異なり、自然界のあらゆる条件を自由に横断して存続するのが可能であるという点を示唆する事ともなっている。ペルクソンは、前章で論じた如く、脊椎動物の進化に伴って次第に人間の知性が形成されてきた点を重視している。更に『進化』では、動物種の進化に

於ける特質は、特定の環境に常に寄生する事がけつして無いものとして表現されていた。ゲーレンもベルクソンとおなじく、人間を、環境に束縛されない柔軟な身体機能を備えた存在として描いている。上述した如く、ゲーレンも人間の身体能力の内、感覚・運動機能を最優先するのである。しかし彼は、人間の秀逸な身体構造に関して、それを自然界で比肩するものの無い独自の特質を表わすものとして考える為に、ベルクソンとは大きく相違して、進化論的な問題を二義的なものとして強く退けるのである。

一定の環境条件に向けて、生まれつき特殊な形で対応していない人間の身体の特質を、生物の進化の過程で考察してはならないという点に関連して、ゲーレンは次の様にも述べている。

「特殊化した器官が特殊化していない器官へと、つまりは、最初にあつた可能性の塊に舞い戻ってしまふなどは、生物学的に考えられない事である。この問題は、本質的に、人間の器官が非特殊化的、つまりは、胎児的もしくは原始的である事が証明される際に、人間進化論に関する根本的な問題となる」(M, 387)

ベルクソンに於いてもゲーレンに於いても、人間の特質を考える際に、活動性の問題はまさにその中軸を成すものとして設定されている。しかしゲーレンは、人間を徹底して他の動物とは掛け離れた存在として見据えている。ベルクソンは、動物に於いて発生した神経系を、動物種を植物種から峻別し得る要素として重視し、更に、この神経系統の複雑な発達が人間の基本的な特質をも規定すると論じている。特に、脊髓や延髄、大脳皮質といった中枢機能は人間の柔軟な活動を支えるものであり、動物種の一つとしての人間を、自然界に於ける他の生命種から際立たせる要素としても考察されている。しかしながらゲーレンは、有機界に於ける他の動物の非常に特殊化した環境適応能力を見れば、人間を進化の過程の最高段階に位置付ける以前に、既に生物の進化は行き着く所まで行っている、と述べている。彼は、形態学的に見るならば、人間の身体とは、環境に於いて適応の為の特殊化を知らぬも同

然なのだ、とも言う。そして、そういった人間の特質を「非特殊化性状」(Unspezialisiertheit)と呼んでいる(Vgl. M, S33-34)。「人間」では、この概念は、他の動物に対して著しく異なった人間の特質を論考する為に不可欠の観点ともなっている。

前章に於いて、ベルクソンが、人間の知覚行為を、周辺の事物に対する「可能的な行動の素描」として考えている事に触れた。ゲーレンも、人間の基本的な事物認識を、その活動の能力と相関的に論じている。しかし彼は、人間は他の動物の如く一定した環境への適応能力を持たない為に、その知覚行為が、本能的な運動へ即座に結び付かない点を重視している。ゲーレンは、人間の知覚は外界の刺激や印象に対してどこまでも開放されているものであり、身体機能の特殊化を欠いた人間が生きてゆくには、環境での自らの行動を常に選択しなければならぬ事を考えている(Vgl. M, S35-36)。「人間」にあつては、人間の「非特殊化性状」を徹底的に重んずる事から、人間の多様な知覚行為や運動の形式に関して、それらが原則的に他の動物と根本的に相違した特徴を持つ点が強調されているのである。

ゲーレンはベルクソンと共通して、人間の知覚行為をその活動の能力と連関させて論じている。しかし彼はベルクソン以上に、自然界に於ける人間の身体機能を卓越したものとして見据えつつ、その存在の特質を考察するのである。「非特殊化性状」の概念を中心として展開されるその人間観は、「進化」の人間観を補完し得る多くの論点を含んでいる。そして、それは特に、「人間」に於いて論ぜられる言語活動の問題に顕著に表明されているのである。

我々は次に、ゲーレンの言語論に於いて、ベルクソンには見出されない論点を明らかにしつつ、両者の対比の意義を明らかにしたい。

言語に関して、「人間」では次の様に述べられている。

「言語に依つて周辺を秩序付け、行為を保留し、状況の直接性を負担免除するおかげで、その時、世界を唯単に表象する事が可能となる。言語に依つて周辺状況から自由になるが故に、あたかも眼前にありありと思ひ浮かべられたかの様な情勢を踏まえて、行為する事が可能となるのである」(M, S200)

ゲーレンは、人間にあつて、生体機能の活力が必ずしも常に本能的な衝動に奉仕せずともよく、思想上もしくは実践上の活動が身体の安全な維持という段階を超出したところで自由に果たされ得るのを重視し、これを、人間に於ける「負担免除」(Entlastung)の能力と位置付けている。言語活動とは、こうした局面の最も顕著な表われを成すもの、として論じられているのである。ベルクソンもゲーレンと同様に、他の動物種とは異なつて、人間は特定の環境条件に行動の形態がいつも結び付いていないが故に、本能的な欲求に束縛されない自由な言語活動の能力を獲得したと述べている。しかしベルクソンは、ゲーレンとは違つて、人間の言語活動を、その生存の条件を構成する要素として強調していない。『進化』に於いて、言語は、人間の知性が製作するいわば一つの道具として考察されている。つまり知性は、無機の物質を扱うかのようにして、言語を使用すると論じられているのである。同書では、まず言語は、知性が自由に駆使し得る道具として見られている。言語活動は、他の生命種とは大きく相違して、人間の知性が観念的な世界を、あたかも無機的な事物を構成するかのように作り上げる為の手段として論考されている。(cf. EG, 628-631)。

しかし、ゲーレンにとつて言語の問題とは、その人間論の特徴を形成する最大の要素である。それは、自己保存の必要性を遥かに超越した次元で表現される、まさに人間に独自の能動的な特質として考えられている。彼が、「言語に依つて周辺を秩序付け、行為を保留し、状況の直接性を負担免除する」と考える際に重視する問題は、言語に依つて対象を命名する為に、我々が、周辺世界から唯単に感受するだけの印象の暴力的な氾濫より開放される点で

ある。ここでは、まず言語は、ベルクソンの様に人間の知性が駆使する道具の如きものとして考えられているのではない。それは、先に触れた「非特殊化性状」を常に色濃く身に帯びた、環境に於ける人間の自由な活動の在り方を決定するものである。

故にゲーレンは、外界の印象を制御して人間の感覚・運動機能の習慣に取り込み、意識を自由に展開する為には、言語活動に拠る周辺状況の統一的把握が必要である事を考えている。外部世界の影響を予測し得るものとして整理しておくという事は、人間にとつて、自己の存在する環境が「客観的に」眼前に現われるという事を意味している。そして、この様な言語活動のおかげで、人間が今現在の状況にあつて存続してゆく必要性に関連する物象以外は、その周囲に一旦据え置かれる事が可能となるのである。

この、言語活動に拠つてこそ、初めて、人間の存在する環境が「客観的に」見えてくるのだという発想は、ベルクソンに於ける道具的な言語観からはけつして見出せないものである。第一章で我々は、『進化』に於いて、人間が生命進化の過程で豊富な運動機能を発達させ、同時に、自己と自己の存する環境を認識するまでの能力を持つに至つたとする点に言及した。ゲーレンは、人間が自分の存在する環境を理解しようとする為には、高度に発達した身体が発揮する最高次元の能力として、まず言語を用いねばならない、と考へるのである。ベルクソンに於いてもゲーレンに於いても、活動性は人間の基本的特質を考察する際に最大の局面であるが、ゲーレンは、この活動性を人間に固有の問題として扱う為には、それを言語の問題として読み解く必要がある事を強調するのである。

ゲーレンは、人間というものは、近辺の物象を視覚と触覚に依つて認知し、遠方の物象は視覚と言語に依つて認知するとも述べている (Vgl. M. Sieg)。人間は、絶えず触覚に頼らずとも環境からの影響を予測する事が可能であり、それは、言語活動に依つて周辺世界をあらかじめ概念的・抽象的に把握し得るからだと彼は考へるのである。



ゲーレンは又、他の動物種は、人間とは異なつて、自らが存在する環境領域の全体的な状況に絶えず依存せずには活動する事が不可能である、とも言う (Vgl. M. S153)。動物の活動は周辺の圧力の為にすぐさま邪魔が入り、新しい刺激を受する度に動物の生体機能は掻き乱され、その動作をやり直さねばならない。彼は、こういつた生物には、人間の為し得る様な周辺世界に対する「客観的な」認知は有り得ない、と考えている (Vgl. M. S166)。第一章で見た如く、『進化』では、生命進化の過程に於いて、動物種の意識形成に関する論考と共に人間の知性の形成についても言及されている。しかし、人間が自ら存在している環境を如何にして「客観的に」認識するのかという事についての詳細な考察は見られない。ゲーレンの言語論は、人間の知性が、他の動物種とは相違する最大の特質として、周辺世界を客観視し得る能力を保持している事を、具体的に明らかにするのである。

更に「人間」では、言語の肝要な要素としての音声面に關しても論考されている。

「高度に發達した言語に於いても、その表現の要素として、 $\wedge$ 抑揚 (Tonfall)、『 $\wedge$ 律動性 (Rhythmik)、『 $\wedge$ 拍子 (Tempo)、『 $\wedge$ 変調 (Modulation)』と云つた音楽性は消滅しておらず、それらは、『 $\wedge$ 統語論的もしくは命名作用的な価値 (syntaktischen oder bezeichnenden Wert)』を有して居る」 (M. S212)

ゲーレンは、言語活動に伴う音声面を持つ「命名作用的な価値」とは、唯ひたすらに外界の物象に向けられたものではなく、発話者の衝動もしくは自己感情を出来る限り明白に確定する為のものでもあると論じている (Vgl. M. S210)。この論点は、非常に重要なものである。第一章では、『進化』に於いて、最下等の生物であつても、環境順応の過程で既に意識形成の可能性があるとされている点に触れた。同書では、動物の活動性と意識形成には明らかに関係があると論じられている。この点に關連してベルクソンは、人間というものは中枢神経機能が非常に發達した動物であり、故に自然界に於いて最も柔軟な意志的活動をやつてのける可能性を持つと考えている。ゲーレンも

又、やはり人間の「意識」を、その活動の能力と相関的に見るのであり、それを、いわゆる「内的要素」としては最初から見做していない。しかし、『人間』に於いては、とりわけ言語活動に伴う音声面での特質こそが、人間の意識形成に多大な影響を及ぼすと見ているのである。

そして、発話に伴う有意な音声は、他者との交流の場面に於いても重大な効果を及ぼすもの、ともゲレンは論じている。彼は、発話と共にある「抑揚」、「律動性」、「拍子」、「変調」といった論理化し難い諸要素に関して、それらは、他者との交流に於いて人間の基本的な関心事を公的なものとする見えない基盤を形作り、他者と共に生きる人間の精神生活に同一の体系を定着化し得るもの、と考えている (Vgl. M, S201-202)。言語の音声面が引き連れる特徴は、有機界に於いて生ずる人間の様々な欲求や関心を他者と共有し得る為の道を開くものであり、暗黙の裡に、共同生活での深い連帯意識を形成する足場ともなる、と見られているのである。

こういった論点は、『進化』にはけっして見出されない、活動性の観点を基軸に据えたゲレンの人間観の秀逸な具体性を表わしている。先程、『人間』に於いて、『進化』とは異なり、活動性を人間に固有の問題として論じる為には、言語活動こそが重視されねばならない、とされている点に言及した。ゲレンの考えている言語の「負担免除」の効力は、卓越した活動性が、人間に既に潜在的に備わった特質としてあるという事を、人間自身が明確に認識する可能性を開くものである。

ゲレンは、共同体に於いて生活を続ける中での、言語の発声に拠る自己感情の再認識とは、いわば幼児期から長い時間を要して培ってゆかねばならない自立的な活動能力である、と考えている。彼は又、こういった能力に依つて啓発される自己感情の再認識こそは、人間が成長してゆくうえで不可欠なあらゆる活動の気力の源泉ともなる、と述べている (Vgl. M, S133-136)。第一章の末尾では、『進化』に於いて、人間の脳の機能というものは、その生

体に潜在する活動性を環境適應の水準のみに傾注させる事はなく、ベルクソンが、その様な人間の可能性を生命進化に於ける「生の躍動」の最も顕著な表われと呼ぶ事に触れた。ゲーレンは、高度な身体機能を持つ人間が言語活動を通じて、如何に環境に於ける自己を開放し得るのかを徹底して論ずるのである。

『人間』では、言語に関して次の様にも表現されている。

「最終的に言語は、思考と意識に於いて、人間の業績の全展開を結び合わせ、統率する。言語に於いては此処（Hier）と今（Jetzt）、そして偶然的所与（zufällig Gegebene）に対する反応からの負担免除が完遂される。言語に於いて経験と交流のプロセスが頂点に到達し、人間のへ世界開放性（Weltoffenheit）は生産的に克服され、無限の行為の構想と計画が可能となる。言語に於いてついに、共通の活動、共通の世界、共通の未来へ向けた人間相互のあらゆる合意が完了する」（M, S241）

『人間』に於いては、先述した様に、シェーラーの人間観は繰り返し強く批判されている。シェーラーの人間論では、動物種の生体機能の発達過程に於いて人間を捉えつつも、その特質を究極的に精神性に見ようとしている。周辺世界からの抑圧や依存より解放され得るものは、最終的に人間の実存の中心を成す「精神」（Geist）であり、これこそが、人間に於いて環境を「客観的に」見据える為の核心となる、と彼は考えている。しかしゲーレンにとって、人間の「世界開放性」とは、まさにその感覚・運動機能の延長線上に行使される言語活動に於いてこそ考察し得るものである。彼は、その「非特殊化性状」という概念に集約される如く、人間とはまず、自然界で常に何らかの態度を取らねばならぬ不安定な存在である事を強調している（Vgl. M, S23）。こういった観点では、シェーラーの尊重する精神性としての人間の特質も又、本来はその身体組織から派生する一要素として捉え返される事となる（Vgl. M, S20-31, S177-179）。同書では、精神や意識といった「内面性」の形成は、繰り返す様に、その感覚・運

動機能を中心とした人間の基本構造とけつして切り離す事が出来ないとして置かれているのである。

ゲーレンの人間論に於いては、これまで論じた様に、完全に形而上的な問題が除外されている。しかし活動性の観点を基軸としたその人間の特質の解明には、『進化』に於ける人間観と共通するものがあるだけでなく、同書には見出され得ない徹底して具体的な問題設定もある。それが、『人間』で考察される言語活動の問題なのである。

### 三、人間の活動性の基盤となる「直立の姿勢」

『進化』に於いて見られる、秀逸な身体機能を持つ人間の基本的特質を強調する為には、『人間』に於ける言語論との対質が有効である。本章では最後に、『進化』の所説の根底を成す生命進化の基本的傾向性に於いて、人間の活動性は如何に把握する事が出来るのかを考察し、この点を、「非特殊化性状」を中核とするゲーレンの人間論がどの様に補完するのかについて、最終的にその意義を明確なものとしたい。

第一章で述べた如く、『進化』では、植物種にはけつして見られる事のない動物種の神経系の役割は、その多岐に渡る活動性の發揮の為として考えられている。しかし同書では、進化の過程に於ける動物の意識形成に関して、移動活動がその意識を支えてきたのであり、もし、動物の生体が衰弱して、次第にその行動範囲を縮小せざるを得なくなった場合、そこには常に植物生活の路線が待ち構えていた、とも述べられている。ベルクソンは、動物種を植物種から分け隔てる特質の境界を明白なものとしては見ていない。

この点に関しては、より一層大きな観点から次の様にも述べられている。

「生命の諸々の特質は、けつして完全に実現されぬもので、常に実現の途上にある。それは、 $\wedge$ 状態 $\vee$ (états)と

いうよりは△傾向∨(tendances)である」(ES, 505)

第一章では、『進化』に於いて、動物種が自らの特質を維持するには、疲れを厭わずに活動し続けねばならないと考えられている点に触れた。こういった所は、なによりベルクソンが、動物の特質を安定した一つの「状態」に於いて見ずに、むしろそれを、本来は不定形な「傾向」として表現していた事を意味している。この様に、「生命の諸々の特質」を常に流動的な「傾向」として見るという事は、まさに同書の所説の基底を成す根本的な発想となっている。

更に『進化』では、生命存在を流動的な傾向性に於いて考えようとする事に関連して、次の如く簡潔に述べられている箇所がある。

「△現在の瞬間∨(moment actuel) に於ける生体は、自らの△存在理由∨(raison d'être) を△直前の瞬間∨(moment immédiatement antérieur) に見出す事は出来ない。その瞬間に有機体の全過去を、その遺伝を、要するに△非常に永い歴史の総体∨(ensemble d'une très longue histoire) を付け加えねばならぬ」(EC, 511)

第一章に於いて、同書では、人間の知覚行為を「可能的な行動の素描」として論じている事に言及した。生体の知覚機能が発達した人間にとっても、環境での「可能的な行動の素描」とは、すべて、「現在の瞬間」を生きる為に有効な行動内容に関する情報を構成するものである。そこではいつでも、行動の選択は現在の必要性に応じて為される事となる。ベルクソンは、人間が備える基本的な認知能力について、それをまず、現在を生きる為の能力と考えるのであり、本来、自らの「存在理由」を問い得る能力としては前提していない。加えて、先述した様に、『進化』では、生物の意識は、生命進化に於ける生体機能の発達過程に即して論じられているのであり、そこでの意識とはあくまで、生命体を構成する要素の一つとして把握されている。ベルクソンはあくまで、自然界に於いて、生物の

意識が形成されてゆく「過程」を重視するのである。

そして、こういった中で、生命進化の基本的な傾向性に関しては、例えば次の様な形で表明されている所がある。

「生命が、我々が今日見る如き状態になったのは、かつては生命に含まれていた相互補足的な諸傾向 (tendances, complémentaires l'une de l'autre) の分裂があった為である。この観点からすれば、生命は全面的に植物のハ葉緑素の機能 (fonction chlorophyllienne) に依存している。これはつまり、あらゆる分裂以前に、その原初の衝動に於いて考えるならば、生命には、何ものかをハ貯蔵所 (réservoir) にたくわえる傾向があったという事である。その何ものかは生命がなければ消失してしまうもので、生命はそれを、ちょうど動物がやってのける様なハ効果的で瞬間的な消費 (depense instantanée efficace) の為に、とりわけ植物の緑色部分の仕方では貯蔵していたのである」(EC, 704)

ベルクソンは、進化の運動の過程に於いて、自然界でのエネルギー吸収の根本的な形態を植物の機能に見ながらも、その優れて効果的な発散の状態を、動物の機能にあつて考えているのである。こういった事から、『進化』では、強力な潜勢力を内包する動物の生体の活動性が、生命進化に於いて、まさにその根本的な傾向性を色濃く体现するものとして考察されている。

ベルクソンは、この点に関連して次の様にも表現している。

「実際、一つの生物とはハ一つの活動の中心 (un centre d'action) である。それは、ハ世界に入り込んでくる或る量の偶然性 (certainne somme de contingence s'introduisant dans le monde) 、つまりハ或る量の可能な活動 (certainne quantité d'action possible) を表わしている。その量は、個体と共に、わけても種と共に変化する。一つの動物の神経系は、その活動が展開されてゆく諸々の柔軟な線を描いている」(EC, 717)

「一つの活動の中心」として生物が表現される際、そこではなにより、生物が秘める潜勢力の度合いが重視されている。そして、特定の動物種の如く、その神経系がより一層の複雑性を増加させてゆくという事は、「一つの活動の中心」に於ける潜勢力の強度が高まると同時に、その潜勢力がまさに具体的な行動能力として、自然界で的確に行使され得る事を意味している。ベルクソンが、人間を「生の躍動」の明瞭な表われと呼ぶのは、「一つの活動の中心」として人間が莫大な潜勢力を内包すると共に、それをこの世界に於いて最も自由に精確に發揮し得る生命存在であると考えるからである。

更に右の引用文では、生物を、「世界に入り込んでくる或る量の偶然性」とも表現している。こういったベルクソンの言葉は、特定の環境領域に常に行動範囲を局限されない人間の自由な存在の特質を端的に示唆してもいる。動物種として、「一つの活動の中心」である人間は、卓抜な運動能力を多方面に発動する事に依つて、その身に帯びる活動の「偶然性」は測り知れぬものともなる。有機界に於いて人間が發揮する多様な能力は、自己保存の必要から由来する活動の反復性を、あらゆる形で突き破る可能性を持っている。そして、ベルクソンにあつて、この様な「偶然性」を孕むほどに自由な人間の活動を考慮するという点に於いてこそ、前章で触れたゲーレンの言う人間の「非特殊化性状」との対質は有意義なものともなるのである。

「非特殊化性状」に關連して、ゲーレンは次の様にも考えている。

「人間の運動は、適応する事を求められていないから、環境に適応的でないのではなく、 $\wedge$ あらゆる動物に達成不可能な適応の準備(für jedes tier unerreichbare Anpassungsbereitschaft)を整えねばならぬからである。人間は互いに協力して働きつつ、自己を比類の無い高度の完成段階へと仕上げねばならない。生理学的な観点からするならば、もしかすると人間の生命ほど、適応反応とは無関係な行為を身に付けている明らかな例はないのかもし

れなく」(M, S146)

ゲーレンには、ベルクソンの様に、動物種を植物種から分け隔てる以前の状態を考慮するという発想はない。又、自然界でのエネルギー吸収の根本的な形態を植物種に於いて考えるという観点もない。先述した如く、ベルクソンは、動物の果たし得るエネルギーの効果的で瞬間的な消費を、生命進化の過程で重視している。「進化」に於いて、生物の存在が「一つの活動の中心」として表現される際に看過されてはならない点は、動物の生体が内包する活動性に、いつも生命存在としての価値が見出されているという事である。ベルクソンは、このような動物種の特質を最も強力に表現する存在として、人間を評価している。こういった中で、ゲーレンをベルクソンに対質する強い意義は、ゲーレンも又、この卓越した人間の活動性をどこまでも重視するという点にこそある。その人間観は、進化の観点を排除しつつも、「非特殊化性状」の概念を基軸として、人間の活動性をあくまで具体的な水準に於いて強調するのである。

人間の「非特殊化性状」は、前章でも論じた如く、『人間』に於いて様々な角度から繰り返し考察されている。この概念を中心として人間論を展開する中で、ゲーレンは、人間の形態学的特徴として、非常に重要な論点を提起している。それは、人間は絶えず任意に「直立の姿勢」の状態を取る事が出来る、という点である。

ゲーレンはこれに関して、それはつまり、環境に於ける人間の視覚空間には、いつも「垂直の目印」(Anzeichnung der Senkrechten)が存在しているとどう事だと述べている(Vgl. M, S151)。チンパンジーは高等知能動物ではあるが、本来、不安定な樹上生活の動物である為に、その両手の機能は完全に解放されておらず、「直立の姿勢」の状態を継続出来ない。拠って、チンパンジーの視覚空間には「垂直の目印」が存在しない、とも彼は論じている(Vgl. M, S151)。「人間」にあつては、人間の概念化した空間世界には、いつも「垂直の目印」が存在



しているおかげで、大地には常に重力の影響が展開しており、それが環境に於ける事物と自己との関係に如何なる秩序をもたらすのかを、人間は明瞭に認知し得る事が考えられている。ゲーレンは更に、人間は、世界に於ける重力の感覚を絶えず既知のものとする事から、その自由な両手に依つて、物体の持つ重み・堅さ等の性質の豊かさを常に一定の状態に正確に把握出来る、とも述べている (Vgl. M. S189)。

『進化』では、進化の運動の過程に於いて、特定の環境領域に縛り付けられなくなった人間の行動能力は、そこに多様な「偶然性」を孕み得るほどに自由であると考察し得る。ゲーレンは、ベルクソンと相違して進化の問題を排除しつつも、人間の「非特殊化性状」から由来する自由が、一体如何なる形態学的な特徴から遂行されるのかを、徹底して具体的に論ずるのである。本章では先に、『進化』に於いて、動物種は吸収したエネルギーを効果的に消費し得るといふ点で評価されている事に言及した。ベルクソンは、動物種としての人間の脳中枢も又、まず運動機構を整備する為に発達したものだと考えている (cf. BG, 718)。人間は、脳中枢機構に依つて、吸収したエネルギーの柔軟な消費を為し得る可能性を秘めている。そして、ゲーレンが、人間は任意に「直立の姿勢」を取る事が出来、その視覚空間には常に「垂直の目印」が存在していると考える際、いわば彼は、そういった人間のエネルギーの消費活動は、形態学的に見て、主として一体どういった体勢に拠つて為され得るものなのかを、具体的に明らかにするのである。

『人間』に於いては、言語活動の問題と共に「直立の姿勢」に関する論点は、非常に重要なものとなっている。他の動物種の如く、栄養素の補給や身の安全の確保を眼目として為される移動活動とは大きく異なり、「直立の姿勢」を維持しながら為される人間の移動活動には、環境順応の水準から超出した実に豊富な内実が備わる事ともなる。第一章に於いて論じた様に、『進化』では、動物種の意識は、移動活動が支えるものとして見られていた。そして、

人間の意識も又、環境適応に於ける神経系統の発達過程で形成されたものとして論じられていた。「人間」では、動物の身体の発達過程に於いて人間の意識形成を論ずるという態度は見られない。しかし同書は、その際立った形態学的特徴としての「直立の姿勢」に拠ってこそ、人間は、自由な意識的活動を展開し得る事を示唆している。ゲレンは、ベルクソンの強調する人間の活動性を、どこまでも具体的な地平に於いて問題化するのである。

「直立の姿勢」に関して、『人間』では次の様にも考えられている。

「自ら精通した世界に於いて、一つの有機生体は一時、完全な静止状態に入り得る。つまり、人間はやすらぐ事を心得ている。動物は差し迫った状況を克服するのに忙しいか、眠り込んでいる。この世界にあつて、人間は平静に留まる事が出来る。それは、この生物に特有な休息の体勢であり、それでもなお、人間は∧直立の体位∨(Aufichtung)を維持している。世界は彼の眼前に鮮明に映じており、まるで我が家に居るかの如くである。しかも、いつでもどこからでも、そこへ行為しに入れるのである」(M, 5177)

人間が環境に於いて平静に存在する事が出来るのは、完全に直立の状態でも、その両手は、身体の平衡を保つ事から解放されており、自ら概念化した世界に向かってどこからでも自由に行為する為の準備を常時取り得るからである。前章で我々は、ゲレンが、まず人間は近辺の物象を視覚と触覚に依って認知すると論ずる点に言及したが、彼は同時に、直立の体位を保つ人間は、経験から学習する事に拠つて、両手の機能を最低限の環境順応の水準からも解放させ得る事を考えている(Vgl. 5188)。先程、『進化』に於いて、「一つの活動の中心」としての人間は、まさに莫大な運動エネルギーを内蔵する生命種として描かれていると論じた。ゲレンは、その形態学的特徴として、人間は唯、この世界に立ち尽くすだけでも、そこに測り知れぬ活動の可能性を秘めた存在である事を、明白に象徴させるのである。

「直立の姿勢」に関しては、プレスナーも又、その重要性を指摘している。「人間の条件への問い」に於いて、「直立の姿勢」は、人間がこなし得る体勢の中でも特別の地位を占めるものとして論じられている。プレスナーは、人間は、自由になった両手をいつでも目の前に持つてくる事が出来る点を強調している。つまり、人間は「直立の姿勢」を取った際、自分の自由で柔軟な身体機能と周辺世界とを同時に眼前に見る事が可能であり、これは、人間の活動の基本的な体勢を表わすと言うのである。プレスナーに於いても、「直立の姿勢」とは、ゲーレンと同様、自由な身体の特質を持つ人間の、まさに基本的な存在の体勢として考えられている。我々はこれまで、「進化」の所説を中心として、人間の活動性の問題を中軸に据えて論を展開してきた。自然界に於いて人間が取り得る「直立の姿勢」は、まさにその存在が体现するあらゆる活動性の基盤ともなる状態なのである。

第一章で我々は、「進化」に於いて、人間という動物種が進化の過程で「寄生の習慣」から遥かに遠く離れ、自己の存在の可能性を持続的に練磨する能力を獲得したという点を考察した。ゲーレンが「直立の姿勢」の問題をめぐって論ずる内実とは、いわば、その様な有機界に於ける「寄生の習慣」からは完璧に隔絶した人間の可能性が、どこまでも具体的かつ自由に発揮されている状況であると言える。第二章で論じた様に、「人間」では、言語の物象に対する命名作用に依って、人間は周辺世界を自らの活動の必要性に即して概念化する事が出来る、としている。ゲーレンは、この様に常に世界を概念化し客観視し得るといふ事は、つまり、人間の周囲に、まさに自由に活用可能な時間と空間が開示されるという事だと述べている (Vgl. M. 2822)。

もちろん、幾度も述べている様に、ベルクソンとは大きく相違して、ゲーレンには生命進化に於いて人間の身体の発達過程を論ずるといふ態度は見受けられない。そして、植物種が明白に体现する「寄生の習慣」という性質は、あくまで「進化」に於いて論じられている問題である。ゲーレンの人間観の要点は、その「非特殊化性状」という

概念に最も色濃く表われている。この概念はなにより、自然界に於いて、人間が如何にして存在する為の空間を形成するのか、という点を論ずるうえでの基軸を成すものである。そして、『人間』に於いては、人間の身体機能に關して、それは最早、他の動物種とは比較にならぬほどの可能性を孕むもの、として考えられている。第一章では、ベルクソンが、人間は中枢神経機能の効力に依つて多様な運動を組み立てる事が可能であり、又、新しい習慣を古い習慣に対抗させる事が出来る、と述べている点に言及したが、ゲーレンは、「非特殊化性状」から由来する、人間の傑出した身体の特質を一貫して具体的に強調するのである。それは、人間の形態学的特徴である「直立の姿勢」を基盤としながら、自由で柔軟な言語活動に依つて、人間自身が切り開く空間世界に於いて独自の達成されるものとして論考されている。なによりも、こういった論点に於いてこそ、ゲーレンは、ベルクソンの評価する人間の活動を補完し充実化するのである。

### 結語

これまで論じた如く『進化』では、人間はその生体機構の複雑な發達を成し得た生物と考えられている限り、生命進化に於ける重大な要素の一つとして見做されている。併せて同書では、人間は「生の躍動」を最も顕著に体现する生命種であるが故に、その限りで、進化の運動の「目的」(Zweck)としても論じられている。ベルクソンは、常に進化の運動の過程に於いて人間を把握しようとする。しかしながら、同書のこういった生命進化の問題は、けつして徹頭徹尾、形而上的なものではない。本論文で幾度も触れた如く、ベルクソンの人間観はいつも活動性の問題を中心にして表現されている。加えて、環境適応の過程でその生物種としての可能性が論じられてゆく限りは、進

化の運動は常に具体的な現象として現われざるを得ないものである。

そして、その進化の運動の過程にある人間観をより一層明確なものとして論ずる為には、これまで本論文で試みた様に、ゲーレンの人間論との比較検討が重要なのである。生命進化の問題を外した彼の人間観は、徹底してどこまでも具体的な地平で論じられている。「直立の姿勢」に象徴される秀逸な身体機構に依って概念化された独自の空間世界を持つ存在者として、つまりは、自然界に於ける唯一の有機体として人間を見るゲーレンの人間観との対質は、ベルクソンの人間観を明らかかなものとする為には、最も有意義なものとして考えられるのである。

## 註

ベルクソンに於ける引用及び参照箇所は、EUVRES (édition du centenaire) 5 édition : 1991, mai に拠る。尚、著作名は次の様に略記する。

EC : L'évolution créatrice, 1907

ゲーレンに於ける引用及び参照箇所は、Arnold Gehlen, Der Mensch, 7. Aufl., Athenäum Verlag, Frankfurt am Main, Bonn1962 に拠る。尚、著作名は次の様に略記する。

M : Der Mensch

(1) 『進化』では、「活動性」の用語が特に概念規定されているわけではない。しかしベルクソンは、自然界に於ける動物の柔軟で広範囲に渡るエネルギーの発散を重視している。彼は、吸収したエネルギーを自由に消費する方向へと進化した動物の特質を評価するのである (cf. EC, 585-602)。同書の全般に於いて、自然界でのこういった動物の特質が、「活動性」(activité)、『運動』(mouvement)、『行動』(action)、『可動性』(mobilité) といった用語に依って多角的に論考されている。そして、この様な文脈の中で、動物種としての人間の基本的特質に関しても言及されるのである。

又、ゲーレンの『人間』に於いても、『行動』(Verhalten)、『行為』(Handlung)、『運動』(Bewegung) といった語

が幾度も使用されている。彼もベルクソンとおなじく、身体機能の可能性を中核として、その人間論を展開している。本論文では、こうした両者の人間観を対質する基盤として、活動性の問題に焦点を絞り込む。

- (2) 『進化』では、人間の「知性」(intelligence)の別の側面も論じられている。ベルクソンは、人間が日常生活を生きてゆく中で便宜的に駆使している知性の機能というものも考慮しているのである。端的に言うならば、それは、あらかじめ指定された等質的な空間に於いて、事物の不連続性や不動性のみを認識しようとする心的態度である。彼は、こういった人間の態度に関して、それは我々が日常を生きてゆく為に不可欠のものではあるが、反面、生命の動態的な性質をけつして如美には把握し得ないものでもあるとして、繰り返し批判している (cf. EC, 626-627, 674-680)。

本章では、同書に於いて、動物種の一つとしての人間が進化の過程で如何に柔軟な意識を形成していったのか、更にその延長線上に人間の「知性」の価値はどの様に把握出来るのか、といった論点をあくまで重点的に考察している。批判的に考察される場合もある「知性」の一面は、なによりこういった動態的な様相にあって捉え返され反省されねばならない事を、ベルクソンは示唆している (cf. EC, 489-492)。

- (3) Vgl. Max Scheler, Die Stellung des Menschen im Kosmos, 11. Aufl., Bonn: Bouvier, 1988, S11-36  
 (4) Vgl. Scheler, ebd., S36-41  
 (5) Vgl. Helmuth Plessner, Die Frage nach der conditio humana, in: Gesammelte Schriften, Bd. 8, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 1983, S169-172

ちなみに、プレスナーも又、自らの人間論を展開するうえで生命進化の問題を排除している。同書では、進化の過程の最高段階に人間を位置付けるといふ事は、単なる強迫観念もしくは希望的観測でしかないと述べられている。そして、それは結局のところ、人間自身の立場から他の生物存在の特質を測定する事でしかないとも考えられている (Vgl. Plessner, ebd., S136-140)。

プレスナーは、同書の考察の主題として、あくまで人間の可能性を現実化する諸条件とは如何なるものか、という所に重点を置いていいる。自然界に於ける人間の特殊な能力を象徴する要素として、彼も又ゲーレンと同様に、「直立の姿勢」を重視しているのである。

- (6) 『進化』では、本来、生命進化の運動を「目的性」(finalité)を超越したものととして描かれている (cf. EC, 720)。ベルクソンは、人間を、進化の運動の過程に於いてあらかじめ設定された到達目標としては、けつして論じていない。しか

し彼は、人間という生命種を構成している身体機能の柔軟な可能性に、独自の価値を見出している。これは同書では、硬直化したイデオロギーの一種としての、いわゆる「人間中心主義」とは何らの関係も無い観点である。

この点に関連して、ベルクソンは次の如く述べている。

「我々の観点からするならば、総体的に、生命は一つの巨大な波の如きものとして現われる。生命の波は、一つを中心から輪を抜けてゆき、その円周上のほとんどすべての点で進化をやめて、立ち止まった場所で振動に変わる。しかしながら、唯一の地点で障害は突き破られ、生命の推進力は自由に通り抜けた。人間の形態に認められるのは、この自由である」  
(EG, 720)